

アジア民衆史研究 第9集

2003年度報告

他者をめぐる空間認識Ⅱ

東アジアにおける民衆の世界観(3)

序文

アジア民衆史研究会が、大会シンポジウム中心から、若手を中心にしたワーキンググループの企画による定期的な研究会で成果を蓄積する方向へ活動方法を変えたのは2001年度からである。さいわい、この運営方法は参加や発言のしやすさ、年間趣旨の浸透、議論の記憶という諸点で長所があるとみなされたためか、毎回、期待以上の規模の研究会が実現している。アジア民衆史研究会に出る時には、聞き慣れない報告や議論の中であらためて広い世界の歴史を考えてみたり比較してみたりするのがたのしい、という参加者も増えている。

ただし、今の運営方式には利点もあるが、この研究会が当初持っていた冒険的な性格、すなわち韓国や中国や台湾やベトナムなど、東アジアの各地に実際に出かけて、その地の研究者と研究状況を語り合ったり、研究会を開いたりするという面も、そろそろ想起されて、国際交流の計画を練ろうとする動きも出てきている。国内での定例方式の研究会が定着してきたからこそ、新しい段階での交流欲求の高まりと言えるだろう。

アジア民衆史研究会の活力は、研究活動のスタイルだけからもたらされているのではない。つねに研究趣旨を表明し、その共有をめざしてきたことがたいへん大きい。アジア民衆史研究会は、2000年度に「東アジアにおける民衆の世界観」を中長期的テーマに立て、その具体化として2001年度は「東アジアにおける民衆の君主観」をテーマに選んだ。2002年度は「東アジアにおける「他者」をめぐる空間認識」とし、さらに2003年度もそれを継続して「東アジアにおける「他者」をめぐる空間認識II」というテーマを決めた。こうした共通テーマは、会員を縛るためではなく、問題設定(問題意識)の共有をはかるためである。中長期テーマの「世界観」については、今のところ、人々の空間・時間・人間に関わる意識の総体とし、人々の発言・行動・経験の実践行為の支え、また制約する意識の特有のあり方という理解に立っている。そうして実践行為の結果が二次的な意識の枠組みを創り出し、こうして意識に支えられた行為と、行為によって創り出される意識は、双方向的に作用しあいながら人間主体を変容させると考えている。「空間認識」という言葉の使い方については、本資料集(第9集)に収録する趣旨文で説明している。大まかには、生活する家・村町などの日常的な場から国家・アジア・世界・宇宙などに至る三次元的な場についての人々の空間認識を指し、身体で実感できる空間もあり仮想的な共同組織の空

間認識もあると理解している。今年度は、権力が境界を設定して空間を切り分け重層的に編成することで自 / 他の序列化が構造化されることを重視した。同時に、そうした空間認識に立ち向かうことで人々が主体的な空間認識を多様に生み出していくプロセスを取り出すことを研究の眼目にした。報告はさまざまであるが、おおむね東アジアの近世近代にかかわる問題を空間認識、自己と他者の関係意識、その変容という角度から検討したものである。

今後のアジア民衆史研究会の活動、国内・国際シンポジウムの企画に生かしていくためにも、本資料集に対する会員・読者からの忌憚のない批判をいただければさいわいである。

2004年5月1日

アジア民衆史研究会代表 安在邦夫 深谷克己

※編集担当より皆様にお詫び

本集に掲載予定だった2003年度第四回の報告および討論要旨は、編集日程の都合により次集に掲載させていただきます。
読者の皆様に深くお詫びを申し上げます。

目次

アジア民衆史研究 第9集

序文

安在邦夫 深谷克己

趣旨文 2003年度 他者をめぐる空間認識II

東アジアにおける民衆の世界観(3)

靱矢嘉史 10

第一回研究会

『「大東京」空間の政治史』を読む

中嶋久人 14

コメント：『大東京』空間」をどう考えるか？

——中嶋久人氏の報告を聞いて——

梅田定宏 22

討論要旨

26

大会（第二回研究会）

北方地域認識と日本海開放論

——1920・30年代の「裏日本」「東北」「北海道」と東アジア——

河西英通 33

植民地観光のなかのナショナリティ

——20世紀初頭の朝鮮というフィールド——

阿部安成 49

コメント：阿部安成・河西英通両報告へのコメント

——もしくは今後のアジア民衆史研究会の進路をめぐって——

	鶴園 裕	67
参加記：阿部安成氏の報告について		
	曾山 毅	74
参加記：03年度第2回研究会に参加して		
	齋藤悦正	77
討論要旨		79

第三回研究会

清末時期の瓜分論にみる国土認識		
	吉澤誠一郎	83
討論要旨		102

第五回研究会

清朝の版図・王権と関帝崇拜 ——乾隆帝の十全武功と関聖帝君の顕聖をめぐって——		
	太田 出	107
討論要旨		129

2002年度第5回研究会

岸本美緒著 『明清交替と江南社会——17世紀中国の秩序問題——』を読む		
	齋藤悦正	134
岸本美緒著『明清交替と江南社会』を読んで		
	米谷 均	138
討論要旨		142

目次

亞細亞民眾史研究 第九集

序言

安在邦夫 深谷克己

宗旨 二〇〇三年度 關於“他者”的空間認識 II
東亞的民眾世界觀 (3)

靱矢嘉史 10

第一回研究會

精讀《“大東京”空間の政治史》

中嶋久人 14

評論：如何理解“大東京”空間？
——由中嶋久人先生談起——

梅田定宏 22

討論要旨

26

大會 (第二回研究會)

北方地域認識與日本海開放論

—— 1920・30年代的“裏日本”、“東北”、“北海道”與東亞——

河西英通 33

殖民地觀光中的民族性

——二〇世紀初期的朝鮮——

阿部安成 49

評論：論阿部安成、河西英通的報告

——或者關於亞細亞民眾史研究會今後的方向——

	鶴園 裕	67
參加記：關於阿部安成的報告		
	曾山 毅	74
參加記：參加 03 年度第 2 回研究會		
	齋藤悦正	77
討論要旨		79

第三回研究會

晚清時期的瓜分論與國土認識	吉澤誠一郎	83
討論要旨		102

第五回研究会

清朝的版圖、王權與關帝崇拜 ——關於乾隆帝十全武功與關聖帝君顯聖——	太田 出	107
討論要旨		129

2002 年度第五回研究会

精讀岸本美緒所著 《明清交替と江南社會——一七世紀中國の秩序問題——》	齋藤悦正	134
精讀岸本美緒所著《明清交替と江南社會》	米谷 均	138
討論要旨		142

목차

아시아민중사연구 제 9 집

서장

安在邦夫 深谷克己

취지문 2003 년도 ‘타자’ 를 둘러싼 공간의식

동아시아에 있어서 민중의 세계관 (3)

靱矢嘉史 10

제 1 회연구회

『[대동경] 공간의 정치사』 를 읽으며

中嶋久人 14

토론자 : [[대동경공간] 을 어떻게 생각할까 ?

——中嶋久人氏의 보고를 듣고 ——

梅田定宏 22

토론요지

26

대회 (제 2 회연구회)

북방지역인식과 일본해개방론

—— 1920 · 30 년대의 「裏日本」 「東北」 「北海道」 와 동아시아 ——

河西英通 33

식민지관광 속의 내셔널리티

—— 20 세기초두의 조선이란 필드 ——

阿部安成 49

토론자 : 阿部安成 · 河西英通兩報告 에의 코멘트

—— 또는 앞으로의 아시아민중사연구회의 진로를 둘러싸고 ——

鶴園裕 67

참가 기록 : 阿部安成氏의 보고에 대해서
曾山 毅 74

참가 기록 : 03 년도 제 2 회 연구회에 참가해
齋藤悦正 77

토론요지 79

제 3 회연구회

清末時期的 瓜分論에서 보여지는 국토인식
吉澤誠一郎 83

토론요지 102

제 5 회연구회

清朝의 版圖·王權과 關帝崇拜
——乾隆帝의 十全武功과 關聖帝君의 顯聖을 둘러싸고——
太田 出 107

토론요지 129

2002 년도 제 5 회연구회

岸本美緒著
『明清交替 와 江南社会—— 17 世紀中国의 秩序問題——』를 읽으며
齋藤悦正 134

岸本美緒著
『明清交替 와 江南社会』를 읽고
米谷 均 138

토론요지 142

「他者」をめぐる空間認識Ⅱ

—「東アジアにおける民衆の世界観」(3)

一昨年来アジア民衆史研究会は、中長期的テーマとして「東アジアにおける民衆の世界観」を掲げ、アジア地域における民衆の空間・時間・人間に関わる意識総体を〈世界観〉として把握し、そこから民衆の主体形成の問題を検討していくことにした。この〈世界観〉とは「人々の発言、行動、経験や実践を支え、規制すると同時に、人々の発言、行動、経験や実践によって創出される認識枠組」であるとの共通認識が一昨年、昨年度の方針において得られている。

以上の方針のもと、一昨年度は主体形成と権威のあり様との関連性を明らかにすべく民衆の君主観について取り上げ、昨年度からは人々が空間をどのように意味づけているか、という空間認識の問題を検討している。

ここでいう〈空間〉とは日常空間のみならず、意識的・仮想的空間も含んでいる。人々は〈空間〉を通して世界で起こるさまざまな事象を受け止め、意味づけようとする。そしてこの空間認識に従って人々はさまざまな実践をなしていく。しかし同時に人々の実践は場の構造を変化させ、前提であった空間認識の変容へとつながっていく。空間認識とは人々の実践を規定する認識枠組であるが、そこには人々の主体的な営みによって変容する可能性が常に内在しているのである。

昨年度は近代移行期のアジアにおける〈他者〉の問題に着目し、さまざまな形で創出・変容する自/他の境界認識の様相を明らかにした。本年度も引き続き〈他者〉をめぐる空間認識を取り上げるが、本年度は18世紀から20世紀初頭までを視野に入れ、特に人々が空間認識を形成し変容させていく際に陰に陽に影響を与える種々の権力の動きに留意しながら検討していくこととした。

確かに人々が抱く空間認識は多様性に富んだものである。ただしそれは国家や資本主義が人々の生きる空間に対して持つ力が弱いことを示すわけではない。人々の生きる空間にはしばしば政治的に不平等・不均衡な関係が発生し、経済的な搾取も行われる。むしろ権力や秩序によって空間編成が強固に押し進められる、換言すれ

ば〈支配〉側の空間認識が圧倒的な力を持って人々の前に立ち現れてくる、そういう状況で生きなければならないからこそ人々は多様な空間認識を生み出すのである。

権力・秩序が境界を設定することで空間を切り分け、自/他を指定して意味づける場合、一定の価値基準によって空間を編成し、序列化する形をとる。これはいつの時代にも見られることであるが、前近代においては、国家・民族・身分・諸集団などを単位に境界が重層的に存在していた。そのため、政治的・経済的あるいは文化的な支配・被支配は必ずしも場と場の間の一元的な序列関係に収斂されることはなかった。

しかし近代へと移行していくなかで、国家・地域権力の施策、外国勢力の登場、世界資本主義の展開などによって、自/他の境界が広範に創出されて新たな空間区分がつくられ、権力や資本主義は、人々を含み込みながら空間を価値づけ、序列化しようとする。空間の序列を一元化・正当化すべく、自/他の空間に中心/辺境、文明/未開、清浄/不潔、先進/後進、富/貧といった絶対的価値が付与される。結果、境界はあらかじめ存在していたかのように意識され、自/他の空間を序列化する価値基準は不可逆的なもののように見えてくる。権力関係や階層関係が場と場の間の不均衡・不平等として収斂され、〈支配〉側の空間認識として表象される。

現在、国家や国民そして国境は不変のものでも所与のものでもないことが明らかにされつつあり、〈支配〉側の空間認識のあり様を示す点については一定の取り組みがなされているといえる。

しかしそれに応答した人々の姿については十分に描き出せてはいないのではないか。人々は葛藤を抱きながらも最終的には国民国家の空間認識へと取り込まれていくだけなのか。あるいは取り込まれずに人々が国民国家とは異なる空間認識を持ち続けたとしても、それを前代の空間認識の残滓とみなすだけでよいのであろうか。

強大な影響力を持つ〈支配〉側の空間認識に、人々は主体的に種々の方法で向かい合ったと思われる。〈支配〉側の空間認識に人々が即応せず、さまざまな齟齬が生じたであろう。また、国民国家の空間認識に取り込まれたかのようにみえても、そこに人々の実践が存在しなかったわけではないだろう。〈支配〉側の空間認識に応答すべく、〈伝統〉的な空間認識を想起したり、〈支配〉側の空間認識の読み替えを行った可能性も

想定できよう。

第1回研究会では中嶋久人さんに大西比呂志・梅田定宏編『「大東京」空間の政治史』の検討をお願いした。20世紀前半、強大な〈支配〉側の空間認識として「大東京」空間はどのような構造をもつことになったのか、その「大東京」空間のなかで中間層をはじめとする人々はいかなる動きを示したか、人々は〈支配〉側の空間認識とは異なる空間認識を生み出したのか否か、といった視点で本書を読み込み、「大東京」空間の空間認識の総体にせまった。

第2回研究会(大会)では河西英通さんと阿部安成さんに報告を、鶴園裕さんにコメントをお願いした。河西報告「北方地域認識と日本海開放論 — 1920・1930年代の「裏日本」「東北」「北海道」と東アジア—」では、函館の一海産物商人が発想・発信した東アジア像・世界認識はどのようなものであったか、そしてそれらが逆に自らの生きる空間についての認識に対していかなる影響を与えたのか、といった点について検討した。阿部報告「植民地観光のなかのナショナリティー — 20世紀初頭の朝鮮というフィールド」は、20世紀初頭に発行された朝鮮を描いた絵図や朝鮮への旅行案内を読み解きながら、そこに込められた日本と朝鮮に関する歴史意識を抽出し、植民地を〈観光〉することの意味を論じた。

第3回研究会では吉澤誠一郎さんに「清末時期の瓜分論にみる国土認識」の報告をお願いした。清末期の知識人層が欧米列強の動向に対する危機感から瓜分論が主張され、それによってはじめて中国という国土認識が構築されていく様相を明らかにした。

第4回研究会では、文純實さんに「朝鮮後期の『邑誌』編纂にみる空間認識について — 『輿地図書』と私撰邑誌の比較から」を報告していただいた。朝鮮、日本、さらには中国における地誌編纂及びその背景にある社会状況の共通性や違いについて実りある議論が展開された。

第5回研究会では太田出さんに「清朝の版図・王権と関帝崇拜 — 乾隆帝の十全武功と関聖帝君の顕聖をめぐって—」の報告をお願いした。清朝の実効支配地域である「版図」について軍事遠征の記憶化と関廟設置の問題から検討され、支配が完全に及んでいない部分に特に関廟が設置されるという空間認識を考えていくうえで興

味深い指摘がなされた。

5回の研究会を通して、国家権力や帝国主義、列強、あるいは資本主義といった〈支配〉側の動向を意識せざるをえない状況下において東アジアの人々が生み出す空間認識について多角的に検討できたと思われる。では〈支配〉側の世界観を意識的には前提としない人々の空間認識はいかなるものであり、それはどのように変容していくのだろうか、次なる課題となつてこよう。

なお第4回の報告については編集日程の関係で次回の論集に掲載を予定している。

アジア民衆史研究会ワーキンググループ

文責：鞆矢嘉史